

今純三

こん じゅんぞう [1893-1944]

弘前市生まれ。代々津軽藩の御典医を務めた家に生まれますが、神経衰弱のため医学に進むことを断念。画家を志して東京で洋画を学び、文展や公募展で入選を重ね腕を磨きます。

1923年 関東大震災での被災を機に青森市に転居して以降、洋画から一転、当時まだ技術的に確立していなかった銅版や石版の研究に打ち込みました。新進気鋭の洋画家でありながら版画技法の開拓に勤しんだ純三は、青森の近代美術を切り拓いた先駆者の1人として知られており、当時のアトリエには関野準一郎や棟方志功、阿部合成をはじめとする芸術家志望の若者が足繁く訪れていたといえます。またこの頃、次兄であり、「考現学」を提唱したことで著名な民俗学者・今和次郎による考現学調査に協力しており、同時代に生きる人々を民俗学的な視点から観察・記録するその手法を徐々に自身の制作にも取り入れるようになります。

1933年から1934年にかけて、純三は県内各地の自然やそこで暮らす人々の生活を、生き活きとしたスケッチで細部にわたって記録し、それらをまとめた銅版と石版による作品集《青森県画譜》を発行しました。考現学的な視点から人々のありのままの暮らしを描き出した純三の代表作であり、そこにはユーモアと同時に卓越した技術力とデッサン力を見ることが出来ます。銅版画制作に打ち込みながら同時に雑誌の連載等も手掛け、1943年には自身の研究成果をまとめた「版画の新技法」を刊行。近代における版画技術の普及と発展に大きな役割を果たしました。純三は1944年に亡くなりますが、奇跡的に戦禍を逃れた作品群は、青森県立美術館をはじめとする郷土の美術館で見ることができます。

関野準一郎

せきの じゅんいちろう [1914-1988]

青森市生まれ。関野は旧制青森中学校に在学中、共に版画同人誌を制作していた同級生に誘われて今純三のアトリエを訪ね、その制作に強い感銘を受けたといいます。中学校卒業後も実家の家業見習いをしながらアトリエに通い、純三のもとで試行錯誤を繰り返しながら銅版や石版における基礎的な技術の習得に励みました。

1939年 青森を離れ、兼ねてより憧れていた版画家の恩地孝四郎を師と仰いで上京。兄弟子達とともに毎月恩地のもとで版画研究を重ね、制作に没頭します。1950年代前半には東京の自宅で銅版画の研究会「火葬町銅版画研究所」を開くようになり、ともに講師を務めた駒井哲郎の他、浜田知明、浜口陽三、年若い加納光於、小林ドンゲ、野中ユリなど、多くの作家が訪れる交流と研鑽の場となりました。

関野は1958年の渡米を皮切りにアメリカに何度か赴き、現地で経験した多彩な技術や手法を自身の作品に取り入れています。創意工夫を凝らした表現で木版画の可能性を追求しながら、人々の生活が息づく風景を主題に捉え、「東海道五十三次」シリーズなどの代表作を手掛けました。1961年にはリュブリアナ国際版画展において花・墓・車のニューヨーク三部作で特別賞を受賞し、国際的な評価を得ます。ライフワークの一つであった人物画では、卓越した観察眼と造形力によって多様な人物の内面や人柄までもを表現し、芸術家としての高い力量と版画研究の成果を発揮しました。1988年に亡くなるまで多数の作品と著作を手掛けた関野の多彩な活動の全貌は、青森県立美術館や町田国際版画美術館の所蔵する資料や作品群から伺い知ることが出来ます。

小館善四郎

こだて ぜんしろう [1914-2003]

青森市生まれ。梶井基次郎の小説「檸檬」にインスピレーションを得た静物画を数多く描いたことから、「レモンの画家」として知られています。

幼少期、病氣療養中だった小館は絵を描くことを日課として小学校から油彩画を始め、旧制青森中学校に入学してからは関野準一郎らと画友になります。また同郷の作家、太宰治の姉が小館の長兄に嫁いたため、義弟として太宰とも親しく交流していたようです。

帝国美術学校を卒業後は青森に帰省、浅虫にアトリエをかまえ、母校である青森中学の図画教師として教育に携わりました。戦後、東京に転居してからも国展への出品や画廊での個展など精力的に制作活動を続けており、1992年には青森県文化賞、2000年には文化庁地域文化功労者表彰を受賞するなど、青森において高く評価された画家です。本展の出品作「おべんきょう」は、小館と太宰の共通の姪にあたる太宰の姉の娘がモデルとなっています。明るい光の中で描かれた柔らかいタッチと、モデルのリラックスした様子から、2人の親密で日常的な空気を感じ取ることができます。

高木志朗

たかぎ しろう [1934-1998]

常盤村（現・藤崎町）生まれ。県内のコンクールで最優秀賞をとるなど若い頃から絵画の才能を発揮し、武蔵野美術大学入学後には棟方志功から「すばらしい絵だ」と作品を絶賛されたといえます。1958年、第1回東京国際版画ビエンナーレに入選し、版画家としての道を華々しくスタートさせました。

高木はフランスの展覧会に出品した際、「日本の色は出ているが形がない」と言われ、日本の形とはどんなものかを考えたといえます。風絵やこけしなど日本的な主題で制作を重ねるうちに、本展の出品作《日本の鬼》の構想を得ます。ポーランド・クラコウ国際版画ビエンナーレ展「日本と社会」のテーマ部門でグランプリを受賞した本作は、鬼の独特な造形と多様な形の版の刷り重ねによって、燃え盛る炎のような力が画面中にみなぎっているように見えます。実験的な造形で自身の主題を明確に表した高木は、関野や棟方に連なる青森を代表する版画家といえるでしょう。

高木は1980年頃から千葉県船橋市にアトリエを構え、市の親善使節団の一員として中国の友好都市に訪問したり、公民館の緞帳を手掛けるなど、晩年まで地域のコミュニティに積極的に関わりながら活動の場を広げていきました。作品は郷土の青森県立美術館や常盤ふるさと資料館などに遺されていますが、その軌跡は千葉でも確かに感じることができます。

棟方志功

むなかた しこう [1903-1975]

青森市生まれ。18歳の時、文芸誌「白樺」で見たゴッホの「向日葵」に感銘を受け*、油彩画家を志して21歳で上京します。帝展入選を目指して制作と出品を続けるなか、川上澄生の版画作品《初夏の風》に影響を受け、木版画を制作するようになりました。棟方は1928年に日本版画協会と帝展において念願の初入選を果たし、画家として大きな一歩を踏み出します。

生涯を通して多様な人物と交流した棟方ですが、特に1930年代からはじまった柳宗悦をはじめとする民藝運動の作家達には大きな影響を受けています。彼らとの交流から仏教や古典文学に対する知識を深めた棟方は、独自に見出した主題を黒と白の対比による素朴ながら強固な表現で彫り出していきました。1938年には官展における版画作品初の特選受賞を果たし、国内で高く評価されます。更に戦後には名立たる国際展での受賞を重ね、世界にまでその名を響かせていきました。

1960年頃から眼病が悪化し左眼が殆ど失明状態となりますが、《花矢の柵》をはじめとする公共空間における大型の作品を手がけ、郷土である青森への想いは晩年まで強く持ち続けながら旺盛な制作活動を続けました。誰の心にも染み入るような素朴な美しさや暖かい人間味、豊穡な生命力を感じさせる棟方の作品は、現代でも多くの人々に愛されています。

*棟方にゴッホの絵を教えたのは、本展出品作家の小野忠弘の実兄・小野忠明です。また、小野忠弘は、棟方からの「おまえは俺より絵がうまい」という賞賛をきっかけの一つとして、美術の道を志したといえます。

橋本花

はしもと はな [1905-1983]

青森市生まれ。青森における先駆的な女性洋画家であり、現在の女子美術大学在学中、当時最も権威のあった帝展に20歳で初入選を果たしたことで美術界の注目を集めました。毎年入選を重ね第13回帝展では《樹下》で特選となるなど若くして洋画壇で存在感を示した橋本は、同世代の画家たちの憧れの存在でもありました。その一人には棟方志功もあり、棟方が橋本からデッサンについての助言を受けたエピソードは有名です。

女性洋画家の草分けでもあった橋本は、佐伯米子、深沢紅子らと「新美術家団体連盟」、三岸節子らと「七彩会」などの女性洋画団体を結成し、人脈を広げながら活発な活動을続けました。1940年からは2年間従軍画家としてインドネシアや中国に赴き、1942年には作家の林芙美子と東南アジアを訪問するなど国外へも積極的に足を運んでいます。《マニラ湾の落日》はこの頃描かれた作品です。1961年にはサンパウロ日本文化会館の招きでブラジルを訪れ、サンパウロで個展も開催しています。

後年は故郷青森の浅虫にアトリエを構え、花や自然風景などの主題を中心に自由な制作活動을続けました。晩年の作である《津軽風景》は、日が落ちて深い青に染まっていく空と風の吹きすさぶ草原が印象的な風景画です。移ろう自然の神秘さをひたと見つめる、画家独自の感性を感じることができます。

斎藤義重

さいとう よししげ [1904-2001]

弘前市生まれ。中学校在学中から美術や文学に親しみますが、特にロシア未来派の美術に衝撃を受けたことをきっかけに、海外の新しい芸術様式の影響で当時盛んに興っていた前衛芸術運動に関わります。一時期は絵画から離れ文学に重点をおいて活動しますが、1930年代頃、構成主義やダダイスムの表現に共感し立体を中心とした造形制作を再開。1936年には第23回二科展で入選を果たし、新進気鋭の美術家として活動しました。

戦時中には徴兵を逃れた斎藤ですが、1945年、空襲によって作品、ノート、小説のほとんどを焼失します。何とか資材を調達しながら制作を続けますが、極貧生活の中で衰弱し、1954年頃から千葉県浦安で散歩やスケッチを中心とした療養生活を送ります。この浦安時代については後に「昔、浦安の祭りをよく見たね。(中略)漁師たちと一緒にになって興奮しました。祭りは芸術の根源ですよ。」と語っており、後年まで斎藤の心に強い印象を残していました。

制作を再開した斎藤は、1957年「第4回日本国際美術展」(神奈川県立近代美術館)に出品した《鬼》でK氏賞を受賞。同年には「今日の新人57年展」で小野忠弘とともに新人賞を受賞。続いて東京画廊での個展も成功させると、名立たる国際展でも出品と受賞を重ね、現代美術の第一線に力強く舞い戻りました。合板に電気ドリルを用いて作られた《青の構成》は、物体の存在感と行為の痕跡を作品化する、この時期の斎藤のコンセプトが明快に表されています。また斎藤は教育者としても優れており、多摩美術大学教授時代には、関根伸夫や管木志雄らをはじめとする、後の「もの派」を代表する美術家にも大きな影響を与えました。

1970～1980年代には斎藤の制作の集大成ともいえる、平面と立体を自在に往還するような空間性の強い表現形式「複合体シリーズ」を手掛けるなど、現代美術の第一人者として衰えることなく常に新しい芸術性を求め、実践し続けました。今も現代アートシーンに多大な影響を与え続けている、もっとも重要な作家の一人といえるでしょう。

阿部合成

あべ ごうせい [1910-1972]

青森市生まれ。旧制青森中学に入学後、同級生であった太宰治と親交を深め文学に熱中。一度は作家を志すも、太宰の文才に衝撃を受け文学の道を断念し、美術の道に進むことを決めます。京都絵画専門学校で日本画を専攻し、美学や西洋絵画などについても幅広く学びました。

卒業後は教員として勤めながら西欧絵画やメキシコの壁画運動を研究。2年後に上京し、1938年には出征する兵士を見送る人々を描いた《見送る人々》で二科展に入選しますが、当時の駐アルゼンチン大使に反戦絵画として評されたことを機に、時流にそぐわない画家と団体展から嫌われます。阿部はこれ以降生涯を通じて画壇とは距離を置き、独自の道を歩んでいきました。

戦時中満州に出征していた阿部は、敗戦後、シベリアへ抑留され1947年に帰国します。帰国後は、シベリアでの過酷な体験や、親友である太宰治の死、生活上の様々な苦悩から、自身の情緒をむき出しにする様な表現主義風の作品を手掛けるようになります。1959年には日本を振り切るようにして渡米。新境地であるメキシコに向かい、現地の壮大な自然風土や文化に感銘を受け心機一転精力的な制作を重ね、日本画の技法とメキシコ壁画の技法を取り入れた新たな画境を拓きました。現地の国立ギャラリーの個展を成功させ、新しい日本美術として高い評価を受けた阿部は1964年に帰国します。

本展の出品作品は2点とも帰国から少し経った、晩年に近い時期に手掛けられた作品です。帰国後の阿部は太宰治の記念碑の制作をきっかけに、死者の存在を感じさせるドクロやミイラ、キリスト教を主題とした鎮魂の絵画を多く描くようになりました。叙情的に描かれた《海を見る詩人》には記憶の中の太宰の姿が重ねられているようにも見えます。戦争による数多の死を経験した日本画家として、声無き者たちの世界を見つめた阿部は1972年に病で亡くなりますが、その苛烈な生涯から「修羅の画家」と称され、現代でも独自の存在感を放っています。

小野忠弘

おの ただひろ [1913-2001]

弘前市生まれ。東京美術学校に入学後、彫刻の専攻と同時に鳥海青児のアトリエで本格的な油彩画を学んだ小野は、卒業後、教員として福井県の中学校や高校に勤務しながら自由美術家協会展へ出品を重ねます。当時描かれた油彩画は、美術批評家の針生一郎に「異常な執念で絵具をぶ厚くもりあげた、というより絵具の塊のひとつひとつで空間を構造的にとらえようとした、おそろべき風景画である」、「ほとんど絵画の限界をはみだしそうな、無謀な力わざだった」等と評されており、早くも既存の様式を越えて独自の造形表現を貫こうとする意志が感じられます。精力的な制作と公募展への出品を重ねた小野は、1957年「今日の新人57年展」で斎藤義重とともに新人賞を受賞、フランスの美術批評家、ミシェル・タピエにより「世界・現代芸術展」の参加作家に選ばれ、「世界に通じる作品」と評されます。1959年にはサンパウロ・ビエンナーレ展とプレミオ・リッソーネ国際絵画展、翌年にはヴェネツィア・ビエンナーレに日本代表作家の一人として招かれ、国際的な注目を集めました。

小野の制作は平面絵画からミクストメディア、モニュメント的な野外彫刻までジャンルレスに行われましたが、いずれも無二の底知れないエネルギーを感じさせます。その活動を、小野と親交のあった市川市ゆかりの詩人宗左近は「小野忠弘という美術家は、戦後の40年間前衛と言われ続けています。一度も保守であったためしがない」と評しています。

1993年から最晩年まで続いた《BLUE》シリーズは、深く神秘的な藍色に、自由なドリッピング、機械部品や漂流物が組み合わされた宇宙論的絵画であり、前衛芸術家として揺るがぬ地位を確立させた小野の代表作です。

工藤甲人

くどう こうじん [1915-2011]

弘前市生まれ。リンゴ農家に生まれた工藤は、家の農作業を手伝う傍、小さな草花や生き物、壁のシミ等を見つめて想像の世界に遊び、文学に熱中する幼少期を過ごします。高等小学校卒業後、画家になりたいとの思いを募らせ上京。川端画学校に通いながら友禅屋に勤め、下描きなどで基礎的技術の習得に励む一方、京都出身の洋画家 西村勇より西洋美術思想について教わり、多方面から画家としての糧を吸収していきます。

20 代前半、日本画の新しい表現を模索しようと福田豊四郎の研究会に参加しますが、出征のために画業を中断。工藤の戦前の作品は失われてしまいます。

戦後、帰郷して農作業の傍ら制作を再開すると、師である福田の誘いをきっかけに出品をはじめた創造美術展で《蓮》が入選を果たし、画家としての再起を果たします。これ以降の工藤の作品には、ボスの《快樂の園》のような、西洋の幻想的な世界観からの影響が如実に表れるようになります。神秘的に描かれた動物や風景の世界は童話のようでもあり、鑑賞者を奇妙な生命力に満ちた想像上の世界へと誘います。

本展出品作《夢と覚醒》が湛える独特の詩情は、工藤がその先で切り拓いた独自の日本画の境地をよく表しています。歩みは遅くとも確実に前進して自ら退くことのないかたつむりに自らを重ねた工藤は「蝸牛居」と名付けたアトリエで制作を続け、2011 年に 95 歳で亡くなるまでその創作意欲を静かに燃やし続けました。

佐野ぬい

さの ぬい [1932-2023]

弘前市生まれ。「佐野ブルー」と呼ばれる青色を中心に、多様な色彩や造形をリズムカルに構成した抽象画で知られます。菓子店の長女として生まれ、幼い頃からあずきの赤茶色や、真っ白な生クリームなど、身の回りにある色彩や形に感性を働かせながら育ちました。近所の映画館で見たフランス映画でパリへの憧れを募らせ、父の「絵描きになれば早く行けるだろう」という言葉をきっかけに画家を志すこととなります。女子美術大学で洋画を学んだ佐野は、卒業後も積極的に公募展への出品を重ね、1969年には念願のパリ行きを果たし画家としての道を邁進していきました。

作品は制作初期から一貫して「青」を基調としていますが、佐野は色についてインタビューで次のように語っています。

「終戦後、ゆっくりした気分で空を見上げたら、透明な空が見えました。しみじみよかった青でした。それが気持ちの中にありました。」

佐野は戦時中の記憶を「モノクロームのような感じ」とした上で、終戦後に周りの風景を見回した時、空の青さや雪の暖かい白、りんごの赤や機関車の黒など全ての色彩が綺麗に見えたと言っています。いずれの言葉から、佐野自身が幼少期から様々な経験を糧に育んできた「色彩」に対する高い感受性を読み取ることができます。

佐野は2007～2011年にかけて母校の女子美術大学で学長を務め、後進の育成にも力を注ぎました。その作品は故郷の弘前市立博物館や青森県立美術館をはじめ、多くの美術館に所蔵されています。

成田亨

なりた とおる [1929-2002]

神戸市生まれ。幼少期を青森市で過ごした成田は、旧制青森中学在学中に偶然出会った同郷の画家 阿部合成に師事し美術を学びます。阿部に「君は抒情詩人だ。浪漫派だ。」と賞され、同時に「作為に満ちたエモーションのない絵は一喝された」という成田は、絵を描く技術よりも本質的な感動を創作動機として重要視するようになっていきました。

武蔵野美術学校 彫刻科を卒業後、制作活動と同時にアルバイトとして映画「ゴジラ」（1954 年）の製作に参加し、これをきっかけに映画美術の世界に入ります。

1960 年に東宝撮影所と特撮美術監督契約を結んだ成田は、その 5 年後「怪獣のデザインを全て担当する」という条件のもと「ウルトラ」シリーズ「ウルトラ Q」に制作途中から参加。ウルトラマンやウルトラセブンをはじめとするヒーローや怪獣、特撮美術のデザインを手がけ、数々の国民的なキャラクターを生み出していくこととなります。

「私は彫刻家ですから、形を基礎に怪獣を考えました」と述べるように、成田の怪獣デザインは、自然や動物など身近なモチーフを融合させて誰も見た事がない意外性のあるフォルムを打ち出している点が特徴的です。ウルトラマンの最終的なデザインは、ドローイングではなく立体の状態で検討されたといわれ、彫刻家として発揮した高い感性を垣間見ることができます。時には彫刻家としての自負と商業的なデザイナーという立場の間で苦悩したという成田ですが、成田がデザインしたヒーローや怪獣は半世紀以上経った現在でも高い人気を誇っており、近年ますますその芸術性が高く評価されています。

馬場のぼる

ばば のぼる [1927-2001]

三戸町生まれ。幼少期から絵を描くことや少年雑誌を読むことを好み、自作漫画などを制作しながら漫画に熱中する少年時代を過ごします。中学校卒業後、海軍予科練習生に志願し、土浦海軍航空隊に入隊。静岡への転属を経て特攻隊に編成されるも、出撃せずに敗戦を迎えました。

復員後はリンゴの行商人や大工の見習い、小学校の代用教員など職を転々としながら、劇団や映画館のポスター、八戸市近くの米軍キャンプのイベントポスターを描く手伝い等をします。その頃知り合った児童文学者 白木茂に出版社を紹介されたことをきっかけに、1948 年に初の赤本漫画「怪盗カッポレ団」を出版。翌年、馬場はすぐに上京し、1950 年から「おもしろブック」（集英社）で連載した「ボストンくん」で人気を獲得します。漫画家 馬場のぼるの人気は、手塚治虫、福井英一と並んで、“児童漫画界の三羽ガラス”と呼ばれる程高まりました。

馬場が絵本を手掛け始めたのは 1960 年代。当時求められる少年漫画と自身の表現に乖離を感じ、デビュー後から強く関心を寄せていた「絵本」に注目します。1967 年に発行した、シリーズ第一作目となる「11 ぴきのねこ」では、とらねこ大将と 10 匹の仲間が繰り広げる可愛らしく愉快的、それでいて意外性のあるストーリーが話題を呼び、翌年の第 15 回サンケイ児童出版文化賞を受賞しました。「自分が面白いと思うもの」を子どもに伝えることを目指し、約 30 年かけて合計 6 冊出版された絵本「11 ぴきのねこ」シリーズは、半世紀以上にわたって今もなお愛されるロングセラーとなっています。その世界観は絵本に限らず陶器や立体作品としても形作られ、見る者を新鮮でちょっと剽軽な馬場の表現世界に誘います。

寺山修司

てらやま しゅうじ [1935-1983]

弘前市生まれ。詩、俳句、シナリオ、映画、演劇など幅広いジャンルで活躍したマルチアーティストです。

青森県立青森高等学校に入学後、新聞部、文芸部で俳句を創作しながら、青森県高校文学部会議や全国高校生俳句会議を立ち上げ、高校生俳句大会の開催や俳句雑誌を創刊し、早くも多彩な活動を始めます。早稲田大学進学後は、短歌研究主催のチェホフ祭で第二回短歌研究新人賞を受賞し、文壇の話題を攫いました。1955年、ネフローゼを患い入院しますが、詩集の刊行など創作活動が続ける中、見舞いに訪れた谷川俊太郎の勧めで書いたラジオドラマ「中村一郎」(RKB 毎日)が民放会長賞を受賞。自信をつけた寺山はこれを皮切りに数々の放送劇や戯曲を発表し、国内外で受賞を重ねていきました。

寺山が立ち上げた演劇実験室「天井桟敷」は、1967年の第一回公演「青森のせむし男」を皮切りに、「大山デブ子の犯罪」や「毛皮のマリー」など次々と問題作を上演しました。寺山は「見世物の復権」というキャッチコピーと、横尾忠則ら第一線のアーティストが手掛けた象徴的なビジュアルの起用によって当時の若者から熱烈な支持を集め、アングラ文化の一時代を築きます。また、演劇と並行して長編映画も手掛け、「書を捨てよ！町へ出よう！」でサンレモ映画祭グランプリを受賞、「田園に死す」で芸術祭奨励新人賞を受賞する等、国際的な場でも多彩な領域で独自の世界観を展開し評価されていきました。1983年に病に倒れるまで多岐に渡って続けた寺山の活動は時代を象徴するものとして、現代でも多方面の創作に強力な影響を与え続けています。

工藤哲巳

くどう てつみ [1935-1990]

大阪生まれ。美術教師の両親のもと幼少期を五所川原市や弘前市で過ごし、上京して洋画を学んだ後 1954 年に東京藝術大学に入学します。専門課程での指導に反発して授業には出ず、過去の美術を学ぶことに興味がなかった工藤は、物理学関係の概説書や科学雑誌の鉱物の結晶、細胞の電子顕微鏡写真のカラー図版等から制作の着想を得ていきました。

大学卒業後、読売アンデパンダン展で発表した作品が注目を浴び、ミシェル・タピエに激賞されるとともに、東野芳明から「ガラクタの反芸術」と称され「反芸術」の旗手として知られるようになります。1962 年以降、約 20 年間に渡ってヨーロッパを拠点とし、変形した人体や性器を用いたショッキングな表現によって西洋社会の人間中心主義を批判。自らの作品を「社会評論の模型」と呼び、美術作品を作っているつもりはないとして、近代の機械文明や管理社会における人間性の喪失を強烈な表現手法で突きつけました。作品はテーマを持ったシリーズとして制作されることが多く、1970 年代前半には「環境汚染」をテーマに一連の作品群を発表、同年代後半からは鳥籠に囚われた人間の頭部に象徴される、内省的、瞑想的な作品を制作しています。

1977 年、サンパウロ・ビエンナーレ特別名誉賞を受賞し国際的な評価を高める工藤ですが、1983 年、体調不良のため帰国。弘前にアトリエを構え津軽凧や縄文をモチーフとした作品の制作を続け、1987 年には東京藝術大学の教授にも就任しますが、1990 年に病で亡くなります。55 年という短い生涯の中で幾たびも衝撃を与えた工藤による「社会評論の模型」は、現代にも通底する様々な歪みや軋轢、またそれに対峙しなければいけない私達に対して、今も挑発的に、攻撃的に、容赦のない問いを投げかけ続けています。